

オーストラリアバオバブ生育記録 ～導入から6年目の開花記録～

西内良・堀川大輔

2017年10月3日の定植から6年が過ぎたオーストラリアバオバブ(*Adansonia gregorii*)について、その開花記録を中心に6年目の生育状況と管理について記録する。

落葉から萌芽

昨シーズンと同様、2023年1月中旬にすべての葉が落葉した。それから4か月弱経った5月17日から少しずつ萌芽を確認することができた。昨シーズンも同時期に同程度の萌芽を確認している。

灌水と施肥

萌芽を確認後、5月中旬から2週間に1回の頻度で灌水を始め、気温の上昇に伴い、6月中旬から徐々に灌水量や灌水頻度を増やし、7月末からは灌水頻度は週2回、水量は約200L/回とし、これを9月5日まで続けた。その後は土壤の乾燥速度が遅くなってきたため、灌水量はそのまま灌水頻度を10日間隔とした。

また、導入以来、無施肥管理だったが、8月7日にオーストラリアバオバブの周囲5点(株元から60cm離れたところで、各点間の距離は等間隔)に深さ約50～60cm程度の穴を空け、1つの穴につき発酵油かす(東商、N:P:K:Mg=4:6:2:0.3)大粒を2個、計10個施用した。

出蕾～開花

1輪目の出蕾日確認は7月28日、蕾の長さは約1cmであった。8月7日には更に2つの蕾を確認した。このとき、1つ目の蕾の長さは約2cmとなっていた。8月8日には4つ目の蕾を確認した。8月30日に、今期1輪目が開花した。20時頃から萼が巻きながら開き初め、21時30分には花卉が平開した。また、この1輪で人工授粉(自家受粉)を試みたが、結実しなかった。9月3日の20時頃、今期2輪目が開き初め21時30分に花卉が平開した。人工授粉は花の位置が高すぎたため行っていない。9月7日の夜に3輪目と4輪目が不完全ながら開花した。これまでの例では21時30分には花卉が平開していたが、

2輪とも同時刻になっても完全に平開しなかった。しかし、2輪が同日に不完全ながらも開花したことから、一方の花を切り開いて花粉を採取し、もう一方の花に人工授粉させた(同株の異花間での自家受粉)。しかしながら、今回も結実しなかった。最終的に、今年の開花数は4輪であった(表1)。これは、当園で2019年に開花が見られて以降、最も少ない開花数であった。

秋以降の状況と今後の展望

今秋は10月30日に葉の黄変を確認した。なお、11月以降は灌水を行っていない。また、12月第4週の時点では落葉は完了しておらず、完了は昨年同様に1月中旬ごろと思われる。

今年、当園で開花が見られて以降、最も開花数が少なかった原因を過去の記録や今年の観察結果から推察すると、昨年の7月下旬～9月中旬の灌水量が例年の7割の量しかなく、生育期の灌水が不十分だった可能性や、周囲の樹木が大きくなったことでオーストラリアバオバブへの日当たりが悪くなり、光合成効率が悪化していることが考えられた。また、一昨年の大量開花による消耗の影響が残っている可能性も否定はできない。

これらの対応として、今年は当該時期の灌水量を平年並みまで増やした。また、オーストラリアバオバブへの日照を遮っていたトックリキワタ(*Ceiba speciosa*)やプセウドボンバックス(*Pseudobombax* sp.)を12月に強剪定し、来年に向けて日当たりを確保した。夏に施用した肥料については緩効性かつ少量のため、来年に好影響があるかは不明だが、様子を観察したい。

また、着蕾が見込めない細い枝や混み合っている枝については落葉期に剪定し、枝の総数を重視するよりも、充実した枝の数を増やすことも検討したい。

表1 導入後のオーストラリアバオバブ開花数

年	開花数(輪)
2017	0*
2018	0
2019	6
2020	14
2021	45
2022	7
2023	4

*: 開花期後にあたる同年10月に定植